

招喚の關係に於いて對立的に見えつゝ、二尊二教は二尊一致の選擇本願に歸せられてゐる。これは何を示すのであらうか。蓋し、淨土眞宗もそれが佛教である限り釋迦教であることに變りはないけれども、その釋迦教は彌陀教に於いて、眞實の意義を見出すのであつて、要門の教主が釋迦に歸せられ、弘願の教主が彌陀と示され、且釋迦教に即して聖道難證、彌陀教に就いて淨土一門可通入路と顯はされたのは、恐らくは機の自覺に基づく佛陀の再發見に依るものではないであらうか。かくて釋迦教を通して彌陀教は發見せられ、彌陀教に依て釋迦教がその眞實性を獲得する。こゝに教卷の所顯があるのであつて、その大意釋では彌陀、釋迦の順序となつて、それは歎異鈔第二章に對應する。これ彌陀教によつて釋迦教の眞實性が發見せられるからである。『大經』が眞實教とせられるのは、彌陀の本願を説くからである。従て教卷は教則願であることを示すものであり、この願の上に行信證が展開するのである。かくの如く善導、元祖にあつては釋迦彌陀の順序で示されたのが、宗祖では却つて

彌陀釋迦の順序になつてゐる。こゝに於いて釋迦教と彌陀教の關係は、相對的には釋迦教に依て彌陀教があらはされるけれども、絶對的には彌陀教に依て釋迦教が眞實たり得る。選擇本願を説くことに於いてのみ、『大經』は眞實たり得るのである。

釋尊時代の印度の國情

春日 禮智

釋尊時代の印度の國勢は、印度人の理想とする轉輪聖王の統一國家ではなかつたが、暗黒を以て知られる印度歴史上、稀に見る文化的にも、政治的にも活潑であり、光輝ある時代であつた。しかしその内容の詳細に亘つては、歴史上不明の點も少くなかつたし、假令それが解つていても、異説紛々、眞偽の解決せぬ問題が次から次へと残つてゐた。今私はこの研究では、從來充分研究さるべくして研究し盡されなかつた一切經の綜合的研究の結果えた資料を基としてまとめ上げたのであるが、かうした梗概では、その百分の一も述べ盡すことができないので、その中の二三の大問題の結論だけ、ここ

に述べておきたい。

當時の印度は十六大國、四大國等の名に依つても解るやうに小國分立の時代であつたが、それが前代より興隆し來つた民族發展の勢に乘じ、統一國家を目指して統合されつゝあつたことは事實である。それが印度を中國と呼び、須彌山説や轉輪聖王の思想の生れてくる所以である。中でも東方の雄、摩謁陀國と、西方の覇者、拘薩羅國とは、共に新興國家であるが、國力旺盛、旭日昇天の觀があり、新興の宗教―佛教の熱烈な護持國であつた。摩謁陀はもとアングの屬國であつたが、頻婆娑羅王は多聞天の太子として生れたと言はれる位で、その若い時代に税金のことからアングに向つて戦火を開き、アング王を殺してその國を併呑し、一躍大國となつた。王は佛より五年年少で、十五歳にして即位、その即位十六年に佛の教化をうけ、三十七年間佛と共に在世した。その領治はマガダ、アング二國四萬二千聚落に及び、兩國の人民の賞讃する所となつた。その都は王舎城で、それは同時に佛教の東方に於ける最大の據點であつた。

王の太子は阿闍世である。彼は提婆達多と共に謀して釋尊に迫害を加へたことは有名であるが、彼がどうして仁愛の深い父を殺したかについては、從來提婆にそのかされただの、前生の仙人殺害の話などが傳説として傳えられてゐるが、それは餘りに根據が薄弱で信じ難く、私はそれより阿闍世が摩訶陀の最重要の所領の一であるチャンパーに重税を課したことを痛く叱責され、それを恨みにもつての所業とする有部破僧事の説が肯綮に値すると思ふものである。この阿闍世が即位して大王となるのであるが、彼も亦即位後改信して熱心な佛教外護者となつた。王の改心については涅槃經梵行品等の説に依り、從來はその業病がもとのやうに傳へられてきたが、これも餘りに簡單すぎる。有部毘奈耶樂事では、王の暴虐を聞いて諸國王が兵を擧げて王舎城に亂入したこと、又その時王舎城に稀に見る飢饉大水降雹惡疫流行等があつて、喪車相次ぐ有様であつたので、王も遂に屈服して、大臣を使として佛を迎へたことが記されてゐるが、此の方が遙かに自然である。王はその子優陀夷跋陀羅に殺

されたので、遂に印度統一を實現する事ができなかつた。

拘薩羅國は西方の雄で、釋尊の母國迦維羅衛の城も、その歴史の古く尊いことを誇つてはいたが、當時は既に拘薩羅國の大王波斯匿の勢力下にあつた。王は迦尸及び拘薩羅を領有した仁王であつたが、晩年その大臣に叛かれ、その子琉璃太子の叛逆があり、その都舍衛城を脱して、東方王舎城の阿闍世王の援助を求めたが、氣の毒にもその城外にたどりついた時疲勞の餘り斃死したのである。王の妹コーサラ皇后は頻婆娑羅王の夫人で、この皇后が嫁にゆく時、その化粧料として迦尸の國を摩訶陀に割讓したことがあり、その後阿闍世が王舎城でクーデターを起した時、王は之と戦つて、之を擄にしたのであるが、再び之を許して、その女金剛を與へ、迦尸の地を還してやつた因縁があるからである。拘薩羅國の琉璃太子は、舍衛城のクータターに依つて王位に即いて大王となり、一方又その私怨のあつた釋迦族を討伐して滅したが、拘薩羅國の不安は増すばかりであつた。即ち内亂はその後も續き、業火は突然舍衛

城をなめた。王は驚いて火を海上に避けたが、その船も亦燃えたので王は船上にて、その船と共に焼け死んでしまつた。それは釋迦族滅亡後僅か七日のことであつたといふことである。

この外當時の大國として知られるものに跋蹉、跋耆がある。跋蹉の都は憍賞彌で、その王優填は最初に佛像を造つた人として、佛教史上有名である。跋耆はミチラーを都とするワビニヤット以來強大であつた毘提婆族と、當時珍しくも共和國であつた毘舍離を都とする離車族とに分れてゐた。毘舍離は維摩居士の説話及び佛滅百年後の十事の非法で有名である。そこは王舎城と舍衛城間の交通の要衝で、風俗華美、市勢繁昌を以て知られた。

尙當時の國際間の摩擦、天災地變、經濟關係についても述べたいのであるが、紙數の都合上、何れ又他の機會に述べたい。今はただ問題の所在のみを點描しておく。

第二十二願の事義

加藤 智學